

〔書 評〕

金 大 中 著／波佐場 清, 康 宗憲 訳

『金大中自伝 1 死刑囚から大統領へ—民主化への道』・
『金大中自伝 2 歴史を信じて—平和統一への道』

(岩波書店, 2011年)

梁 炫 玉

1. は じ め に

本書は、大韓民国（以下、韓国）の第15代大統領を歴任し、2000年にはノーベル平和賞を受賞した金大中の自伝で、全2巻となっている。一生を民主主義、正義、平和、民族のために生きた金大中の生涯は波乱に満ちている。植民地下で生まれ、第2次世界大戦の終戦と韓国の独立、朝鮮戦争と南北の分断、軍事政権による独裁、民主化運動など、決して平凡なものではなかった。本書は、金大中の厳しくも険しい生き方と彼の政治哲学が凝縮されている回顧録でもある。

金大中は2009年8月になくなったが、大統領退任後、長い時間をかけて執筆していた自伝が本書である。第1巻は、『死刑囚から大統領へ—民主化への道』であり、生まれたときから大統領になるまでの怒涛の時代の回顧である。1973年、拉致されて海に投げこまれようとした時、祈るとイエスが現れたこと、1980年には軍事法廷で死刑を言い渡されたときの心境などが詳しく書かれている。第2巻は、『歴史を信じて—平和統一への道』であり、大統領時代、南北和解政策はどのように実現されたか、国内を民主化に導き、対北朝鮮を対立から和解に転換させた希有な政治家の国政報告を直接聞くことができる。

この自伝は小説より面白い韓国の政治史とも言えるべく、激動の韓国現代史を理解するうえでこれ以上の本はないと思ひ、書評というよりはこの自伝の内容について文章を引用しながら紹介していきたい。この自伝は、2006年7月から始まった金大中の口述¹⁾と各種資料を元に京郷新聞社の論説委員である金沢根が41回にわたる口述インタビューを通じて初稿を代表執筆し、金大中本人の検討と多くの関係者たちの諮問と監修を受けて出来上がったという。“私の自伝は私が死んでから出版してほしい”という論旨により、一周忌を迎えて出版された。妻である李姫鎬が原稿を最終的に検討したうえで、巻頭の序文には

1) 『歴史を信じて』、金大中、岩波書店、2011年、p. 461。“七月二七日、自伝執筆のための口述を始めた。金大中図書館のオーラル・ヒストリー・プロジェクトも兼ねていた。自伝を書く金沢根京郷新聞論説委員、柳相栄金大中図書館長、崔敬煥秘書官、張玉秋局長、張信基研究員が加わった。口述は約四〇回にわたった。”

自ら夫に宛てた手紙形式の文章も載せている。第1巻、第2巻ともに、500ページ以上の大きな本であるが、その分量でもアジアにおける希有の政治家の一生を記録するには足りないと思うほどの‘韓国政界の巨人’の足跡が生々しく綴られている大著である。

自伝1と自伝2の目次は次のとおりである。

金大中自伝1 死刑囚から大統領へ—民主化への道

序文（人生の締めくりにあたって〈金大中〉／愛するあなたへ〈李姫鎬〉）／地図／第1章：島の少年〈一九二四～三六年〉／第2章：私を愛した人，私が愛した人〈一九三六～四五年〉／第3章：熱い心と厳しい世間〈一九四五～五〇年〉／第4章：死と隣り合わせ〈一九五〇年〉／第5章：戦争の中の成功と挫折，そして挑戦〈一九五〇～五三年〉／第6章：落選，また落選〈一九五四～五九年〉／第7章：李承晩政権崩壊〈一九五九～六〇年四月一九日〉／第8章：善良な総理を守った熱血スポーツスマン〈一九六〇年四月～六一年五月〉／第9章：「五・一六」—暗黒の時間〈一九六一年五月～六二年五月〉／第10章：永遠の同志「五月の新婦」〈一九六二年五月～六三年一〇月〉／第11章：全羅道が当選させた朴正熙大統領〈一九六三～六四年〉／第12章：独善，無能，ウソとのたたかい〈一九六四～六七〇年〉／第13章：木浦の戦争〈一九六七年〉／第14章：四〇代の大統領候補〈一九六八～七〇年〉／第15章：兵営国家のタブーを破る〈一九七〇～七一年〉／第16章：民心の反乱，旋風から台風に〈一九七一年〉／第17章：「総統の時代が来る」〈一九七一年〉／第18章：遊説大長征〈一九七一年〉／第19章：マスコミから消えた「金大中」〈一九七一年〉／第20章：三段階統一論〈一九七二年〉／第21章：「一〇月維新」と亡命〈一九七二年〉／第22章：イエスが現れた〈一九七三年〉／第23章：拉致事件の韓日決着〈一九七三～七四年〉／第24章：緊急措置第九号〈一九七三～七四年〉／第25章：再び，「維新」殺気の中へ〈一九七五～七七年〉／第26章：特別な病室は，特別な監獄〈一九七七～七八年〉／第27章：「維新」の悲鳴を聞く〈一九七八～七九年〉／第28章：腹心の銃弾〈一九七九年〉／第29章：ソウルの春〈一九七九年二月十二日～八〇年五月〉／第30章：純潔な「五月の光州」〈一九八〇年〉／第31章：「金大中，死刑」〈一九八〇年〉／第32章：世界の叫び「金大中を救え」〈一九八〇～八二年〉／第33章：監獄—小さくも，大きな大学〈一九八一～八二年，獄中生活〉／第34章：激情の第二次亡命〈一九八二～八四年〉／第35章：嵐の帰国〈一九八四～八五年〉／第36章：五五回の軟禁，「東橋洞刑務所」〈一九八五～八六年〉／第37章：六月抗争〈一九八六～八七年〉／第38章：大統領選でまた，敗北〈一九八七～八八年〉／第39章：民心に道を尋ねて〈一九八八年〉／第40章：公安政局の亡霊〈一九八九年〉／第41章：民心へのクーデータ，三党合同〈一九九〇～九二年〉／第42章：地域感情と偏向報道〈一九九〇～九二年〉／第43章：また，国民を泣かせる〈一九九二年〉／第44章：ケンブリッジの追憶〈一九九三年〉／第45章：統一と平和の産室，アジア太平洋平和財団〈一九九三～九五年〉／第46章：民心の海へ〈一九九五～九七年〉／第47章：大統領金大中〈一九九七年〉／〈主要登場人物〉

金大中自伝2 歴史を信じて—平和統一への道

地図／第1章：長く、重い冬〈一九九七年一二月一七日～九八年一月〉／第2章：「閣下と呼ばないで」〈一九九八年二月二五日～五月十二日〉／第3章：国の体質を変えた四大改革〈一九九八年〉／第4章：米国の八泊九日〈一九九八年三～六月〉／第5章：牛の群，板門店を越える〈一九九八年六～九月〉／第6章：奇跡は，奇跡的に訪れない〈一九九八年九～一〇月〉／第7章：金剛山観光〈一九九八年一～九月〉／第8章：二一世紀は誰のものか〈一九九八年一二月～九九九年三月〉／第9章：四大国外交の仕上げ〈一九九九年二～六月〉／第10章：純真，柔弱な政府ではない〈一九九九年六～九月〉／第11章：「金大統領がいなければ，さらに一〇万人が死んでいた」〈一九九九年一一～一二月〉／第12章：新しいミレニアムの中へ〈二〇〇〇年一～三月〉／第13章：深夜，北に行った特使を待つ〈二〇〇〇年二～六月〉／第14章：「不安な，恐ろしい道を来られました」〈二〇〇〇年六月一三～一四日〉／第15章：現代史一〇〇年で最高の日〈二〇〇〇年六月一四～一五日〉／第16章：太陽を受けて咲いたもの〈二〇〇〇年六～九月〉／第17章：福祉は施しではなく，人権だ〈一九九八年～二〇〇〇年一〇月〉／第18章：二〇〇〇年秋，輝ける日々〈二〇〇〇年一〇月〉／第19章：ビル・クリントンとブッシュ，そして朝鮮半島〈二〇〇〇年一一～一二月〉／第20章：初めの一滴が最も勇敢だ〈二〇〇〇年一二月〉／第21章：遅れてきた女性省〈二〇〇〇年一二月～〇一年三月〉／第22章：人権国家の新しい灯火〈二〇〇〇年五～九月〉／第23章：知識情報強国，夢が現実に〈二〇〇〇年九～一〇月〉／第24章：民主党総裁を辞める〈二〇〇〇年一〇月～〇一年二月〉／第25章：春，体の具合が悪かった〈二〇〇二年三～六月〉／第26章：「赤い悪魔」とロウソクの火〈二〇〇二年六～一〇月〉／第27章：青瓦台を出る〈二〇〇二年一〇月～〇三年二月〉／第28章：大統領職を離れて〈二〇〇三年二月～〇五年一二月〉／第29章：国民より半歩だけ前へ〈二〇〇六年一月～〇八年五月〉／第30章：それでも永遠なるものはある〈二〇〇八年五月～〇九年六月〉／第31章：人生は考えるほど，美しい／〈主要登場人物〉／訳者あとがき／金大中略年譜

2. 著者金大中の略歴

1924年1月6日全羅南道務安郡（現在は，新安郡）荷衣面後広里で生まれ，1943年木浦商業学校を卒業した。1945年車容愛と結婚するも死別し，1962年当時YMCA 連合会の総務を務めていた李姫鎬と出会い，生涯の伴侶であり政治的にも同志として縁を結んだ。1961年に行われた第5代民議員補欠選挙で国会議員に初当選したが，5・16軍事クーデター²⁾によって一度も議員バッジをつけることも議席に座ってみることもできなかった。1963年民主党から立候補し，木浦で第6代国会議員に当選した。その後，第7・8・13・14代国会議員として活発な国会活動に励んだ。

1970年には新民党から大統領候補に選出され，1971年第7代大統領選に出馬したものの，90万票差で落選した。1972年10月維新³⁾が公布されると，身辺の危険から日本に亡命し，

2) 1961年5月16日，朴正熙の主導で陸軍士官学校第8期出身の軍人が第2共和国を暴力的に倒し，政権を掌握した軍事クーデター。

3) 第4共和国は1972年10月維新によって樹立された韓国四番目の共和憲政体制であり，維新体制とも

アメリカと日本を中心に韓国民主回復統一促進国民会議などを結成し、言論や韓国系社会を通じて維新政権に反対する民主化運動を展開した。1973年8月には東京滞在中に韓国中央情報部によって拉致され、帰国中に水死させられそうになったが、九死に一生を得て延命した。帰国後は自宅軟禁が続いたが、そのような状況下でも民主化運動を主導した。1980年には全斗煥政権下で連行され、5・18光州民主化運動⁴⁾に絡んで「内乱陰謀事件」の首謀者とされ、81年軍事裁判で死刑判決が確定したが、教皇をはじめ世界各国の良心的な知識人からの救命運動が広がった結果、無期懲役に減刑された。その後、82年に刑の執行停止で釈放され、治療という名目で渡米し亡命生活を送ったが、85年に当局の反対と脅迫を押し切って帰国した。しかし、空港で隔離されて再び自宅軟禁されることになる。1987年「平和民主党」を結成し、その年の12月に行われた第13代大統領選に出馬したが、野党候補だった金永三⁵⁾との候補一本化に失敗し、落選した。1992年にも民主党から第14代大統領選に出馬したが、金永三に敗れて再び落選し、その後政界からの引退を表明した。1993年にイギリスへ出国し、ケンブリッジ大学で客員教授として活動したが、7月に帰国して、「亜細亜・太平洋平和財団⁶⁾」を設立し、理事長に就任した。1995年に政界復帰を発

呼ばれるが、大統領一人による独裁体制である。1972年7.4南北共同声明を利用して10月17日、当時の憲法までも改正して長期執権を求めていた当時の朴正熙大統領は全国に非常戒厳令を公布して、国会解散、政党活動の中止、一部憲法の効力停止等の非常措置を発表したうえで、統一主体国民会議を構成した。11月21日国民投票で維新憲法を確定し、朴正熙は大統領に選出されて27日就任した。これがいわゆる10月維新であり、この時期を維新時代と呼んでいる。第四共和国政府は民主的憲政体制を否定する独裁体制を構築した。第四共和国は、民主主義を熱望する国民の絶えない抵抗の中で、朴正熙大統領の暗殺事件が起きて維新体制は幕を下ろした。

- 4) 1979年10・26事件によって当時の朴正熙大統領が暗殺されて維新体制が崩壊したことで、韓国は民主化に向けた政治的激動の時代となった。混乱の中で権力を掌握した全斗煥保安司令官を中心とする新軍部勢力は、権力基盤を固めていった。これに反対して全国的に学生運動が広がり、1980年5月15日ソウル駅デモなどで新軍部勢力を圧迫した。すると、新軍部勢力は1980年5月17日「非常戒厳全国拡大措置」を発表し、軍事力を使って抵抗勢力を逮捕、投獄した。しかし、新軍部勢力の動きは光州地域を中心とした市民の抵抗を誘発させることとなる。光州市民は執権勢力によって暴徒とされ、孤立した中で軍の残忍な鎮圧と虐殺に対抗するために自衛的武装をし、5月17日以降10日間の闘争を展開したが、軍の暴力的鎮圧によって民主化運動は失敗に終わった。
- 5) 韓国の第14代大統領。在任期間は1993年2月－1998年2月。32年ぶりに文民政権を誕生させた。第13代大統領選挙当時、金大中と野党の候補一本化をめぐる意見が対立し、金大中とは袂をわかつ。第14代大統領選でも両氏は激突したが、金泳三が勝利した。
- 6) 金大中は政界を引退する際、研究財団を構想していた。韓国統一と民主主義、アジア平和のための拠点として推進した「亜細亜・太平洋平和財団（略して、亜太財団）」は金大中がイギリスに滞在時から国内では側近と研究者たちによって準備が進み、翌年の1994年1月27日にオープンした。海外顧問にはゴルバチョフ元ソ連大統領、コラソン・アキノ元フィリピン大統領などを、海外諮問委員には和田春樹東京大学名誉教授など16人を擁した。国内顧問・諮問委員にも学界、宗教界、法曹界、放送界を網羅して委嘱している。

亜太財団は、創立宣言文を通じて三つの目標と計画を次のように示した。

一つ、朝鮮半島の平和的かつ民主的な統一の理念と政策を研究開発する。

二つ、東亜細亜・太平洋時代を迎えてアジアに広がっている民主化の実験がアジアの土壌にしっ

表して、‘新政治国民議会’を結成し、97年12月18日に行われた第15代大統領選に新政治国民会議から出馬し、当選を果たして98年2月25日に第15代大統領に就任した。就任直後の金融危機などの難題もあったが、積極的に対処して早期に克服する一方、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）に対しては太陽政策⁷⁾を掲げ、2000年6月13日～15日、金正日と分断以来初めての南北首脳会談を開催し、‘6.15共同宣言’⁸⁾を発表した。これは南北関係の改善に大きな成果をもたらすとともに50年以上続いた朝鮮半島での敵対関係を清算し、平和への新しいページを開くものであった。同年12月には、南北関係の改善および民主主義と人権擁護に努めた功績が認められ、韓国人初のノーベル平和賞を受賞した。2003年に大統領を退任したが、2009年8月18日急性呼吸不全症で波乱万丈の生涯を閉じた。著書には、『金大中獄中書信』、『大衆経済論』、『3段階統一論』など20冊余りがある。家族は、妻の李姫鎬と三人の息子がいる。

3. 第1巻の紹介

年代順に出来事をまとめた2冊の自伝であるが、第1巻では出生から第15代大統領選までのことを振り返っており、激変する韓国現代政治史のど真ん中で振り回されながらも真の政治家の道を歩もうとする人間金大中が感じられる。第1巻の序文で自らの人生を回顧し、“私は、私の人生は苦難に満ちてはいたが、決して不幸だったとは思わない。何かを成し遂げたからということではなく、正しく生きようとそれなりに努力したと思うからだ。”⁹⁾と述べている。金大中の人生哲学を表す言葉である。

なぜ政治を始めたのかについては、“世の中を変えるためだった。朝鮮戦争中、避難先の釜山で起きた「政治危機」¹⁰⁾を目の当たりに、新しい世の中を夢見た。”¹¹⁾と明かしている。さらに、“私は政治を憎悪したり、政治家を蔑んだりするようなことはしなかった。

かりと定着できる道を研究開発する。

三つ、我々が世界平和に寄与できる道を積極的に研究開発する。

他に、亜太財団は3原則・3段階統一案を示しているが、これは金大中の統一案でもある。それを簡単に要約すると、3原則とは平和共存、平和交流、平和統一であり、3段階統一案とは第1段階‘共和国連合制’（1連合2独立国家）、第2段階‘連邦制’（1連邦2地方自治政府）、第3段階‘完全統一’（1民族1国家1政府）である。

- 7) 太陽政策は、韓国政府が採用していた北朝鮮への友好的な外交政策で、金大中、盧武鉉政権下この政策が採られていた。
- 8) 金大中と金正日による初首脳会談の後、合意して発表した共同宣言。主要内容は、①統一問題の自主的解決②一国家二体制の統一案志向③離散家族、非転向長期囚の問題解決④諸分野の協力、交流の活性化による相互信頼回復⑤早期に当局間の会談開催の合意、などである。
- 9) 『死刑囚から大統領へ』、金大中、岩波書店、2011年、序文 p. v.
- 10) 李承晩政権下で行われた1950年5月30日の総選挙で野党が圧勝したことにより、大統領の再選が厳しい状況となったのが事件の背景にある。1952年臨時首都であった釜山で李承晩大統領の再選と独裁政権の基盤を固めるために、大統領直接選挙制の政府案と内閣責任制の国会案を抜粋混合した‘抜粋改憲案’を強制的に通過させた政治的波紋である。この改憲によって李承晩大統領は政権延長に成功し、戒厳令を布告して政権の危機を克服したが、軍部が国内政治の動向に敏感に反応し介入するきっかけともなった事件である。
- 11) 前掲書、序文 p. vi.

政治家は現実の場で国民と力を合わせ、国民を苦しめる構造的な悪を取り除かなければならない。”¹²⁾と政治家としての役目を強調している。政治と人生哲学については、“私は政治を深山幽谷に咲く純潔な百合の花ではなく、泥水の中で咲くハスの花のようなものだと考えた。悪を見て行動を起こさない隠遁と沈黙は、欺瞞であり、偽善だ。私は自分のことを立派な政治家だとは思わないが、政治家だったことを後悔していない。常に何かをし続けていたので疲れはしたが、自らと適当に妥協せず、怠けることを警戒してきた。知識の頂点に立つ哲学者ではなく、隣人を愛し、人類のために一身をささげて努力する人間になりたかった。”¹³⁾と語った。

本人の一生を振り返っては、“振り返ると、波乱万丈の一生だった。政界に入り、国会議事堂に席を得るまでに九年、一九七〇年に大統領候補になったあと大統領になるまでに実に、二七年かかった。五度にわたって死線を乗り越え、六年間の監獄生活、数十年におよぶ亡命と軟禁生活をした。大統領候補、野党の総裁、国家反乱の首魁、亡命者、容共分子など、私の呼称が変わるたびに、この地に大きな変動が起こった。その中心に私はいた。”¹⁴⁾と語っている。いわゆる死刑囚と大統領というイメージ、それが金大中の象徴と言えよう。

この本は、最初のところに今まで知られていなかった家族のことについて触れている。この自伝が出版された当時もっとも話題となった話でもある。金大中は、この自伝を通じて初めて母親が父の本妻ではなく、第二夫人だったことを告白している。子供の頃はもちろん、政界に入ってからこの問題で“多くの攻撃といやがらせを受けたが、「沈黙」で通した。それは、生涯を通して妾宅に住んだ母の名誉を守りたかったからだ”¹⁵⁾と言いつつ、また、“母は天国にあって、自身が遺したこの世の因縁ともすべて和解したであろうと思うからだ”¹⁶⁾という表現で言えなかった辛さを表した。そして、典型的な田舎暮らしの純粋な子供の生活などが目に浮かんでくるような少年期の思い出話も続く。

独立後の混沌とした政局において、青年期の金大中は建国準備委員会木浦支部に参加しているが、木浦支部が多数の共産主義者に占められても共産党に特別な拒否感を感じていなかったという。本書の中で、金大中は何人かの著名な人物について評しているが、独立と大韓民国樹立の混乱期に国の前途を案じていた金九¹⁷⁾に対する評は印象的である。金九については、“金九先生を敢えて評すれば、永遠に輝く独立闘士であり、絶世の愛国者だったが、政治家としてはもの足りないところがあったと思う。「左右合作」論議の時、そこに加わるべきだった。分断を防がなければならないというのであれば、初めから積極的に

12) 前掲書、序文 p. vi.

13) 前掲書、序文 p. vi.

14) 前掲書、序文 p. vi.

15) 前掲書、p. 1.

16) 前掲書、p. 1.

17) 政治家・独立運動家。上海に亡命し、大韓民国臨時政府に参加して1944年大韓民国臨時政府主席に選任された。信託統治反対運動を主導した。李承晩とともに右翼を代表する。

行動すべきだった。そして、信託統治に無条件反対とばかり言うのではなく、期限付きの信託統治を受け入れて三年とか五年後に独立を模索すべきだった。そしてその時期を逸し南側だけの単独政府を樹立すると決まったのなら、総選挙に参加すべきだったと思う。金九先生が前面に出て総選挙をやっていたら、その政党は過半数の議席を確保していただろう。そうなると李承晩と韓国民民主党は窮地に追い込まれていたと思う。これは私だけの推測ではなく、当時の民意のとうとうたる流れだった。”¹⁸⁾と評している。

歴史に仮定法を持ち込むことほど愚かなことはないとしたうえで、“もし金九先生が五月一〇日の総選挙に志を立てていたなら、李承晩は大統領に当選できなかったらうし、反共を口実にした親日派によるその後の独裁もなかったらう。李承晩の大統領当選は韓国現代史の悲劇の始まりだった。李承晩政権で親日派が勢力を得、その親日派の子孫たちが恵まれた環境の中でいい教育を受けて代々栄華を享受してきた。”¹⁹⁾と指摘し、当時の金九の政治判断を残念がっている。また、“政治家は最善でなければ次善を選ぶべきだ。状況が悪ければ最悪を避けて、最低限の手当てをしなければならぬときもあるものだ。政治家とは現実を見極めて未来に向けての真理を求めるものであって、真理のために現実を度外視してはいけないというのが政治家としての私の考えだ。”²⁰⁾と政治家たる者の姿勢について披瀝しつつ、“金九先生は私と同胞が尊敬する方だが、政治的行跡においてもの足りなさが残る”²¹⁾と評した。

政治懸案について高見を聞くために、進歩的な政治家である曹奉岩²²⁾と会ったのは1956年である。曹氏はかつて共産党に身を置いたが、その後共産党を公然と批判し、左翼勢力と完全に決別して注目されていた人物だった。李承晩政権で農林相をつとめ、第2・3代大統領選でも善戦し、当時は時代を先取りする政治家として、その進歩的な社会民主主義路線が注目されていた。金大中はその曹氏に申し出た。“先生は共産党も経験され、いままた、民主陣営で仕事をしておられます。先生こそ、共産党のどこが悪いのかを国民に知らせる適任者だと思います。公正な立場からなぜ共産党を辞めたのかについて話されれば、国民にも共産党の実情がわかり、支持も高まると思います。”²³⁾これに対して曹氏は、“金同志の言うのはその通りなんだが、その場合、かえって一部の支持層が離れていくのではないかと憂慮する人もいます。”²⁴⁾と答えている。金大中には意外であった。本書の中で、当時の心境をこのように語っている。“私は失望した。指導者なら、少なくとも曹奉岩ほどの政治家なら、国民のために決断するときは決断しないといけないと思った。自分の支持票も大事だが、その票に対しても言うべきことは言う、そんな勇気が必要だと思った。

18) 前掲書, pp. 34-35。

19) 前掲書, p. 35。

20) 前掲書, p. 35。

21) 前掲書, p. 35。

22) 1898.9.25-1959.7.31。大韓民国の独立運動家、統一運動家であり、進歩的政治家である。

23) 前掲書, pp. 61-62。

24) 前掲書, p. 62。

たとえ、その票が逃げたとしてもそうすべきなのだ。それなのに、ぐずぐずしていた。先生はその後、スパイ容疑で処刑されただけに、なおさら、惜しまれる。私の知る曹奉岩先生は人間味にあふれる魅力的な人物だった。ただ、難局を突破する要領に欠けていた。”²⁵⁾ 金九と曹奉岩についての評価をみると、金大中がどう生きてきて、どう生き残ったのかがわかってくる。金大中はこの険しかった韓国現代史において、幾度もなく死の危機から生き残り、ついに生涯の夢であった大統領にまで上り詰めた。金大中は、“状況が悪ければ最悪を避けて、最低限の手当てをしなければならない”²⁶⁾ 忍耐と“難局を突破する要領”を金九と曹奉岩の挫折という歴史的悲劇から学んだのである。金大中は、原則を守りながらも方法の面では柔軟な実事求是を追求し、生き残って自分の夢を政策に反映できる機会を持つことのできた政治家であった。

金大中は、朝鮮戦争が勃発した日は出張で木浦から上京しソウルに滞在していたが、北朝鮮軍のソウルへの進軍を知り、自分も南へ避難を始め、20日かけて木浦に着いたと振り返っている。生死をさまよったその悲惨な経験とともに青年期のことも色々と書かれているが、後に妻となる李姫鎬との出会いに関する話もある。最初からお互いに気が合って、時局や人生についての話を多く交わしたという。

当時の政治家に対する金大中の評価をもう少し紹介したい。当時軍政下の警務部長だった趙炳玉²⁷⁾について“趙氏は米軍政で警務部長を務めた。その時のことはたいして評価したくない。しかし政治家に転身した後は粘り強く独裁と闘った。趙氏のいない野党は考えられないほど、その指導力は優れていた。加えて雅量もあった。政治家として度量があり、何よりも勇気のある人だった。”²⁸⁾と評している。また、次の選挙を通して韓国に平和的な政権交代の歴史をつくるのが自分に与えられた使命だと思っている張勉²⁹⁾ 総理については“私にはそんな張勉総理が軟弱に見え、時に情けないとも思った。しかし、総理には遠い未来を見通す目があった。韓国の民主主義の土壌がやせこけていることを見抜いていた。”³⁰⁾ 張総理は人間的には非の打ちどころがなかったが、たくましが足りなかった。そこが混乱期の指導者としての欠点だった。しかし、民主主義に対する強い信念は揺るぎなかった。”³¹⁾と評しており、指導者たる者はどうあるべきなのかを指摘しているように思われる。

政界に飛び込んで、初めての選挙は江原道麟蹄から出馬しているが、候補登録妨害事件に関する内容が詳しく紹介されている。政界に進出してから7年目にして初当選した当時

25) 前掲書, p. 62。

26) 前掲書, p. 35。

27) 1894. 5. 21-1960. 2. 15。大韓民国の独立運動家、教育家であり、警察官、政治家である。

28) 前掲書, p. 74。

29) 1899. 8. 28-1966. 6. 4。日本植民地期の教育家、宗教家、翻訳家、出版家、文人でもあり、外交官、政治家でもある。1951年国務総理となり、その後野党の政治家として副大統領にも当選された。1960年 4. 19革命を契機に誕生した議院内閣制の第2共和国では総理を歴任した。

30) 前掲書, p. 89。

31) 前掲書, p. 89。

の感激も共感できるように紹介してある。ところが、5.16軍事クーデターが起きたために、国会議員に当選しながらも一度も議員バッジをつけることができなかつた逸話とともに、当時の活躍も紹介している。特に、1964年の日韓会談に関連して条件付反対の立場を示したが、世間からはサクラ³²⁾呼ばわりされ、自分の政治人生においてもっとも苦しい時期であったと告白している。

40代旗手論を打ち出した第7代大統領候補指名選挙では金永三との一騎打ちの結果、48票差で逆転勝利した有名な逸話や維新時代を予見して総統時代が訪れると宣言した話などよく知られた事実もある。その総統制や永久執権の陰謀を満天下に発表したその日が1971年4月18日に行われたソウルの奨忠壇公園遊説である。約100万人の聴衆が集まったこの遊説を妨害しようとした政府の措置が面白い。“その日に政府と与党は奨忠壇公園の遊説を妨害しようとする様々な措置をとった。まず、公務員と公共団体の職員ら全員に、家族ぐるみのピクニックに参加させた。参加しない者は欠勤扱いとした。故宮も無料で開放した。その日は日曜日だったが、郷土予備軍に非常招集をかけた。そしてソウル市内のすべての映画館は入場無料となった。”³³⁾と当時を紹介しており、一人でも遊説が行われていた奨忠壇公園に行かせるまいと必死だった政府の思惑がみえてくる。

さらに1971年大統領選の投開票の不正に関する話がある。本人夫婦の投票も無効とされているが、投票用紙に選挙管理委員会の印鑑がなかったというのが理由だったという。大統領候補本人の投票が無効とされてしまう始末だったので、選挙では勝っていたものの、投開票で負けてしまったと悔しがっている。あの有名な金大中拉致事件³⁴⁾の顛末と生還に関する話もある。また、維新体制下での自宅軟禁や死刑宣告、収監生活などの波乱に満ちた履歴が展開されている。

1970年代と1980年代の若者は金大中が進歩的ではなく、さらに政治路線も不明瞭であるという非難をしたり低評価をしたりしたことがある。1987年に行われた第13代大統領選の結果、野党が負けてしまったことについて、金大中は本書の中で、“私は本当に申し訳なく思った。どんな理由があつたにせよ、野党の候補一本化に失敗したからだ。”³⁵⁾と敗北の責任を口にしたあと、“私だけでも譲歩すべきだった。過ぎ去ったことだがあまりにも悔いが大きかった。”³⁶⁾と大統領選でみせた野党の分裂と敗北の責任からは逃れられないことを告白している。その結果、金大中に嫌気が差した多くの人が与党へ、または他の野党政党へ離れていった。特に、1997年大統領選を前にして、金大中が5.16軍事クーデターの中心メンバーだった金鍾必³⁷⁾と連携したときは、進歩陣営の多くの人は‘大統領病患者’と

32) 何かを企んで、ある集団に属した人。特に、与党と野合する野党政治家のこと。

33) 前掲書，pp. 181-182。

34) 1973年8月8日、金大中が、韓国中央情報部（KCIA）により日本の東京都千代田区のホテルグランドパレス2212号室から拉致されて、ソウルで軟禁状態に置かれ、5日後ソウル市内の自宅前で発見された事件である。

35) 前掲書，p. 428。

36) 前掲書，p. 428。

37) 軍人出身の政治家。2等陸佐として5.16軍事クーデターに参加。その後、第6～10、13～16代国会

金大中を非難した。

機会主義者とみられかねない危うい政治的決断であるが、このような政敵との和合を可能にしている金大中のモットーには「実事求是」という精神がある。大統領になるためには手段と方法を選ばない権謀術数に長けた政治家として評価する一部の国民もいるのは事実である。しかし、李明博³⁸⁾ 政権下での民主主義の危機、南北関係の危機、庶民経済の危機など3大危機のうえ、盧武鉉が逝去する切迫した状況で年老いの金大中は決して優雅なことばかり言っていない。盧武鉉元大統領の逝去以降、入院するまでの2ヶ月間80才半ばの老人金大中ほど民主主義を脅かす勢力に立ち向かった人はいないだろう。2009年6月11日に行われた「6.15南北共同宣言」9周年の記念行事での演説がそれを物語っている。“「行動する良心」になりましょう。行動しない良心は悪の側に立つことです。”³⁹⁾ “自由な国になろうとするなら、良心を守ってください。真に平和で、正義が通る国になろうとするなら、行動する良心にならなければなりません。傍観することも悪の側に立つことです。独裁者に頭を下げ、へつらい、猟官する、といったことは言わずもがなです。”⁴⁰⁾ と言い、人々を励ましながらか精根尽きて倒れたのである。金九と曹奉岩とは違った意味での民主主義戦線で倒れたのである。

4. 第2巻の紹介

第2巻には、大統領就任直後から退任後の逝去直前までが収録されている。大統領任期5年間は金大中に韓国の民主化と祖国統一、民生問題の解決のために、70年間全身全霊で構想してきた理想を実現できる最初で最後の機会であった。

当選直後に直面した国家の経済的危機を克服し、1980年代獄中で構想したという韓国のIT化の実現、‘太陽政策’を掲げて南北間の和解の象徴となった6.15南北首脳会談、そしてノーベル平和賞の受賞、成功した2002年サッカーワールドカップの開催など、大統領任期中の話は退任した元大統領の国政報告でもあり、民主主義政治家の全貌が収められた回顧録でもある。

第2巻は、何月何日誰に会って何を合意したかについての内容が中心なので、第1巻とは違う印象である。もちろん波乱万丈の人生をつづった第1巻と比べると第2巻は大統領任務遂行記録書のようなものではあるが、それでも所々金大中の考えや感想が述べられている。特に金大中の最も大きな功績の一つである南北首脳会談に関する内容がそうである。第2巻は大統領選で勝利したにもかかわらず、経済危機のために苦しい心境のなかで始まった任期初期のことから展開している。

経済危機による整理解雇導入法案が紆余曲折の末に可決されたことや、労使文化を成熟させた労使政委員会については、“労使政委員会は私の魂がこもった作品だと思ってい

議員と、第11代、第31代国務総理を歴任した。金永三、金大中とともに‘三金’と呼ばれ、韓国政治を牽引した。民主共和党、新民主共和党、民主自由党、自由民主連合の総裁・代表を務めた。

38) 学生運動家、企業家出身の政治家。現在韓国の第17代大統領。

39) 『歴史を信じて』、金大中、岩波書店、2011年、p. 499。

40) 前掲書、p. 500。

る”⁴¹⁾と誇らしがっている反面、就任してから政府組織の改編作業が不可避だったために、民間コンサルティング社に政府組織の診断を依頼し、部処の統廃合を推進したものの、政治論理が介入して強い反発を招いた結果、小さいが効率的な政府を目指した自分の夢が未完の改革に終わったと振り返っているところでは悔しさがみえてくる。北朝鮮の核問題や西海海戦⁴²⁾があった当時は本人の軍事的な知識が十分ではないことがわかっていたために、いくつかの指針を伝えただけで現場での軍事的なことはすべて軍に一任したことも明かしている。一方、訪中した際は、江沢民の歌唱力に驚かされたことを紹介しながら、“江沢民主席は大きな人物だった。非常に率直だった。私に、腹を割り、隔意なく話した。私とは、すべての面で気が合った。彼は私的に、また外交的に、非常に微妙な発言をためらわなかった。それぐらいに、私たちはお互いを信じた。”⁴³⁾とも評している。

第2巻のハイライトはやはり南北首脳会談に関する内容である。南北首脳会談を10日も残していない時点で、林東源⁴⁴⁾ 国情院長は金正日に会っているが、金大中への報告が印象的である。金正日に会った印象について、“相手の言葉を傾聴し、話し好きでした。頭脳が明晰で素早い判断力があるという感じを受けました。明るいほうで、ユーモア感覚もなかなかのものでした。開放的で実用的な考え方の持ち主のようでした。言葉は論理的ではありませんが、主題の核心を逃さないの、良い対話相手だという印象を受けました。とくに、年長者には格別な礼をもって接するという感じを受けました。”⁴⁵⁾と紹介している。金大中本人が北朝鮮へ出発する前に行った国民への挨拶の中で、“「行ってきます」ということばを言い忘れていた。無意識のうちに緊張していたようだ。”⁴⁶⁾と明かしており、その重圧が伝わってくる。南北共同宣言文も合意に至っておらず、錦繡山宮殿⁴⁷⁾ 参拝の問題も決着をみぬまま出発することになったのが緊張の原因であった。

41) 前掲書, p. 15。

42) 韓国では、延坪海戦と呼んでおり、2回の延坪海戦がある。第1次延坪海戦は、1999年6月15日北朝鮮の警備艇4隻と魚雷艇3隻がわたりがに漁船20隻とともに韓国の西海北方限界線を越えて韓国領海を侵犯し、それに対応した10隻余りの韓国海軍の高速艇と哨戒艦などに先制射撃を行った結果発生した衝突事件。この交戦により、北朝鮮の魚雷艇1隻が沈没、420トン級の警備艇1隻が大破し、その他の警備艇も船体が破損した。韓国軍の高速艇と哨戒艦2隻も船体の一部が破損される被害を受けた。韓国軍は7人が負傷しているが、北朝鮮は20人余りの死亡者と30人余りの負傷者を出しているものと推定された。

第2次延坪海戦は、2002年6月29日第1回目の延坪海戦があった地域（延坪島西側14マイル海上）で起きた南北の海戦である。わたりがに漁船の警戒にあっていた北朝鮮警備艇2隻が韓国領海を侵犯し、それに対応した4隻の韓国軍高速艇に奇襲攻撃を行い衝突が起きた。この交戦の結果、韓国軍の高速艇1隻が沈没、6人が死亡、19人が負傷したが、北朝鮮の被害状況はわかっていない。

43) 前掲書, p. 102。

44) 外交安保首席、統一部長官、国情院長等を歴任し、金大中大統領のトレードマークである‘太陽政策’を立案・執行した人物。

45) 前掲書, p. 208。

46) 前掲書, p. 216。

47) 故金日成主席の遺体を安置して聖域化したところ。

金正日に空港まで出迎えられ、一緒に車に乗って平壤市内をパレードしたが、その車中で交わした会話はそれほど多くなかったと述べている。沿道に並んだ数十万人の熱狂的な歓迎の群衆とその光景に圧倒されて会話ができる状況ではなかったとのことである。その車中で金正日が金大中を安心させるためにと話しかけた内容は南北の置かれた関係を物語っている。“北に来るのが恐ろしくなかったですか。恐ろしいのにどうして来たのですか”⁴⁸⁾。また、金正日いわく、“今回、金大統領の平壤訪問を国情院が主導していたら、同意することはなかったでしょう。国情院の前身である安企部や中央情報部に対する印象が、とても悪いからです。ところが幸いなことに、アジア太平洋平和委員会と現代グループが行う民間経済次元の事業がうまくいき、活性化しているので、やることにしたのです。”⁴⁹⁾という、首脳会談を受諾した背景も紹介している。興味深いのは、金正日の統一観を紹介している部分である。“私は完全統一までにはこの先、四〇年、五〇年がかかると考えています。そして、私が言うのは、連邦制ですぐに統一しようというわけではありません。それは冷戦時代に言っていた話です。私の言う「低い段階の連邦制」というのは、南側が主張する「連合制」のように軍事権と外交権は南北の両政府がそれぞれ保有し、漸進的に統一を推進しようという概念です”⁵⁰⁾と言い、一つの政府を表す「連邦制」という用語に執着していたことを明かしている。敏感だった金正日のソウル訪問については、金大中の人間的な訴えに、迷っていた金正日の姿が目につかぶ。“金委員長はしばらくの間、何も言わなかった。彼が迷っているのは明らかだった。何が彼の決心を妨げているのかは、わからなかった。だが、ほんの少し、彼が動揺しだした。”⁵¹⁾と金大中は当時の緊迫した瞬間を明かしている。

金正日から聞いて驚いたという話しを紹介しているが、金正日が、“大統領に秘密事項を正式にお話します。米軍の駐屯問題です。九二年初め、米国共和党政権の時期に、金容淳書記を米国に特使として送り、「南と北は戦争しないことにした」と言いました。そのうえで「米軍が引き続き残って、南と北が戦争しないよう、防ぐ役割をしてほしい」と要請しました。「東北アジアの力学関係から見て、朝鮮半島の平和を維持しながら米国が来ているのが好ましい」と伝えたのです。”⁵²⁾と言うと、金大中は“では、どうしてメディアでは相変わらず米軍の撤収を主張しているのですか。”⁵³⁾と聞き返した。それについて金正日は、“それはわが人民の感情をなだめるためですから、理解していただくようお願いします。”⁵⁴⁾と答えている。そして、錦繡山宮殿の参拝問題は林東源国情院長などの説得によって参拝せずに済んだので、金大中もほっとしていたに違いないと思うと、南北間に横たわっ

48) 前掲書, p. 220。

49) 前掲書, pp. 228-229。

50) 前掲書, p. 235。

51) 前掲書, p. 237。

52) 前掲書, p. 240。

53) 前掲書, p. 240。

54) 前掲書, p. 240。

ているイデオロギー問題が悲しくなる。説得内容を見ると、“南の国民の七〇%以上が、錦繡山宮殿への参拝に反対しています。金大統領の指導力が損なわれると首脳会談の意味が色あせ、合意事項の実行が困難になりかねません。互いの利益になる方向で推進すべきです。”⁵⁵⁾ という、林東源国情院長の話である。

アメリカのクリントン元大統領については、“クリントン大統領は、人間そのものも純真だった。”⁵⁶⁾ と人間的な魅力を口にしながら、“断言するが、クリントン大統領が平壤に行ったなら、朝鮮半島の歴史は変わっていた。”⁵⁷⁾ と残念がっている。

退任後の出来事も色々と述べている中で、特に後任の盧武鉉⁵⁸⁾ 元大統領に関する話が多い。南北対話や民間交流などが中断する恐れがあるという忠告を無視して盧元大統領が対北朝鮮送金事件⁵⁹⁾ 特別法案⁶⁰⁾ を公布したことに対してはショックだったことを明かしている。そのことは事実であるとした上で、“いい暮らしをしている兄が貧しい弟を訪ねていくのに、手ぶらで行くわけにはいかないではないか。しかし、法的な問題があり、「現代」を通して提供した”⁶¹⁾ と告白している。この特別法案の公布を契機に両者の関係は悪くなったが、盧武鉉との夫婦同伴の晩餐会ではとても不愉快だったと振り返っている。

李明博⁶²⁾ が大統領に当選された2007年の大統領選の結果について、盧武鉉の在任していた5年間に民主党の支持基盤が弱体化したと残念がっている。対北朝鮮への送金に関する特別法案の公布、党の分裂等は間違っていたと指摘したうえで、原則もなくハンナラ党に連立政府を提案したことや最大支持基盤である全羅道の人々と若者を失望させたことなどは実に残念だったと盧武鉉政権に苦言を呈している。なお、李明博大統領当選者が建設会社に在職していた当時と同様に傲慢な態度をとり続けるうえ、大統領の就任演説でも何の哲学やビジョンも示さず、政策をただ羅列しただけで具体性を欠いていると辛らつに批判している。さらに、反北朝鮮主義者である人物を統一部長官に任命したことについては、金大中・盧武鉉元大統領が在任した10年間の努力が台無しになるのではと憂慮している。

現政権を批判する中で、韓国の右翼について述べているが、韓国の右翼は親日派がその根本であり、彼らは富と権勢のために二つの道を選んでいると言及している。一つは、独立後李承晩に接近し、金九より劣勢にあった李承晩は躊躇することなく反民族勢力を迎え入れたとしている。二つは、彼らの反民族的な罪状を隠ぺいするために反共を免罪符にし

55) 前掲書, p. 244。

56) 前掲書, p. 308。

57) 前掲書, p. 316。

58) 第16代大統領。在任期間は、2003年—2008年。

59) 2000年6月に林東源院長が指揮していた国家情報院は現代グループと緊密に協力して、中国銀行のマカオ支店に開設されていた北朝鮮の大聖銀行口座など北朝鮮側が指定した三つの口座に1億ドルを送金したとされる事件。これは、金大統領が南北首脳会談を開き、南北の和解ムードを高めるために、首脳会談に応じてもらう対価として北朝鮮に送金していた。

60) 対北朝鮮秘密送金事件の真相究明のために特別検事制導入法案が2003年3月15日公布された。

61) 前掲書, p. 442。

62) 第17代大統領。在任期間は、2008年—現在。

たと指摘している。その上で、本人は政界を退いてから時間は経ったものの、反民主、反国民経済、反統一の路線をたどっている現政府を座視することはできないと断言している。また、自分は長い間大統領中心制度を支持してきたと明かしながらも、本音は副大統領制の導入であるとも告白している。韓国にも権力の均衡を舵取りできる副大統領が必要であると認識しているのである。大統領中心制度の変更も考慮すべきではないかという助言も付け加えている。

5. お わ り に

韓国民主主義の象徴でもある金大中の生涯を振り返りながら、激動した韓国現代史を見つめ直すよい機会だっただけに、この自伝は、韓国の第15代大統領であり、2000年ノーベル平和賞受賞者である金大中の記録であるとともに、韓国現代史の記録でもある。

金大中は実に波乱万丈の人生を送った韓国政界の巨人であった。民主主義は金大中の生涯を通して貫いた信念であり、価値でもあった。韓国の民主主義は、金大中が残した歴史と論旨から離して語ることはできない。韓国の民主化運動の中心にはいつも金大中がいた。

金大中が生きた時代は、まさしく激動の韓国現代史そのものと言えよう。朴正熙⁶³⁾、全斗煥⁶⁴⁾、盧泰愚⁶⁵⁾と続く軍政に金大中は最も憎まれ、数度にわたって死の淵に追い詰められながら、民主化と平和統一への意思を貫き、ついに大統領に上り詰めた。その生涯は、朝鮮半島の緊張を解き、軍事政権の韓国から平和で民主的な韓国に作り替える苦難の道そのものだった。そのようなアジアにおける希有な政治家の自伝であるからこそ、その言葉一つ一つには重みがあり、説得力があった。

この自伝を通じて、今まで漠然と知っていた金大中のことはもちろん、韓国現代史、特に韓国現代政治に関して金大中の生々しい話を聞くことができ何より良かった。政治ドラマや以前出版されていた著書などでしか知らなかった金大中の生涯に再度敬意を表したい。金大中と同じ世代では様々な苦難を経験している。植民地下での生活、独立、軍政、戦争、南北の分断、高度経済成長、民主化のための闘争などを体験しながら生きたのである。そのような世代の指導者として民族の道標となった金大中の生涯が輝いて見えるのはあの混迷した厳しい時代を生き抜いたからであろう。金大中も自伝の中で死刑囚が大統領になったのは一つの奇跡であったと書いている。その奇跡は本人のものでもあるが、国民が起こした現代史の奇跡でもあると記している。金大中とともにした多くの国民への気持

63) 軍人・政治家。韓国の第5～9代大統領。5・16軍事クーデターを主導し、1963年12月から1979年10月26日まで大統領職を歴任した。経済開発5カ年計画などで経済面では評価される半面、3選改憲および維新憲法等による長期執権で野党や学生らと絶えず衝突した。

64) 軍人、政治家。韓国の第11・12代大統領。在任期間は1980～1988年。1979年12月12日軍事クーデターを起こし、軍部を掌握した。その後、5・17非常戒厳の全国拡大措置によって政権を掌握し、これに反対した5・18光州民主化運動の流血鎮圧を主導した。1995年拘束起訴され、1審では内乱罪および反乱罪の首魁容疑で死刑を言い渡されるが、控訴審では無期懲役を宣告された後、1997年に赦免された。

65) 軍人、政治家。12・12軍事クーデターや5・17非常戒厳の拡大措置などに参加。韓国の第13代大統領。在任期間は1988～1993年。退任後の1995年には政治資金事件などで拘束されたこともある。

ちと民主化への熱気が新たに伝わる。2冊の自伝は激変の韓国現代史をもう一度考えるうえで良い歴史書になるものと思われる。

そして、読者としての感想を述べ、この大著の書評を総括したい。1924年の出生から1997年末の大統領選までの70年余りを収録した第1巻はその展開にスピード感がある反面、大統領就任以降を収録した第2巻は第1巻とはまったく違った印象である。第1巻の場合は、金大中しか証言できない興味深い事件が多いが、速いテンポで韓国現代政治史の流れを感じさせる展開となっている。それに対して、第2巻は‘日誌’と言っていいほど様々な事件や内容を記録しており、第1巻ほどのスピード感はない。

そして、著者が言いたいことと読者が知りたいこととは決して一致しないのが自伝の普遍的問題であるが、いくら詳細にかつ正直に書いた自伝でも隠したり漏れたりする内容はある。著者が意図的に隠す場合もあれば、重要な事案ではないとの認識で言及しない場合もあると思う。1971年の大統領選で金大中は選挙公約として、“中央情報部の廃止，地方自治制の実施，郷土予備軍と教練の廃止，学校の育成会費廃止，不正腐敗の一掃，大衆経済の実施”⁶⁶⁾などを約束した。この選挙公約の中で国民にもっとも大きな反響を巻き起こした郷土予備軍廃止問題を、大統領就任後は当時とは比較できないほど安保環境がよくなったにもかかわらず、一切言及していない。また、1997年末の経済危機の際には、財閥改革と官僚改革を断行しなければならないと力説したが、大統領就任後はその構想からは遠ざかっている。このような重大な事案に関する説明がまったくないのは残念に思う。

最後に、金大中の哲学を含意している第2巻の末尾に記した言葉を紹介したい。

“私は、民主主義，正義，平和，民族のために生きようと努力してきた。中庸の哲学の中で一貫した人生を生きようと常に自分に言い聞かせてきた。五度に及んだ死の危機，六年間の獄中生活，数十年間の監視と軟禁，亡命生活を克服した。困難に遭うたびに、いつの場合もその瞬間ごとに意味づけをしてきた。それは生きていることの確認だった。それでも、どうして揺るがないことがあるだろうか。私の苦難と一緒に加わって私を支えてくれたたくさんの人たちがいたからこそ可能だった。そんな人たちに心から感謝したい”⁶⁷⁾
“一瞬たりとも気を緩めると命を失う刃の上に立ち，時には，富貴栄華の誘惑を受けたりもしたが，それでもいつも正しい選択をしたと思う。振り返ってみると，はるか遠くのことになるが，取り出して点検してみると激情の瞬間，瞬間だった。波乱万丈の一生だった。民主主義のために命をささげて闘争した。経済をよみがえらせ，南北和解の道を開くのに渾身の力をふりしぼった。歩んできた道に至らなかった点はあるが，後悔はない。私にとって最も怖いのは歴史の審判だ。我々はいっときは世の人びとをだますことはできても，歴史をだますことはできない。歴史は正義の側に立っている。”⁶⁸⁾

金大中はノーベル平和賞を受賞した人権大統領として，また韓国に民主主義を確立した‘行動する良心’として多くの人々に記憶されるだろう。

66) 『死刑囚から大統領へ』，金大中，岩波書店，2011年，p. 182。

67) 『歴史を信じて』，金大中，岩波書店，2011年，p. 507。

68) 前掲書，pp. 507-508。